



昭和23年 棟方志功

No.98

平成27年3月5日

公益社団法人日本山岳会富山支部

## 平成26年度年次晩餐会が開催されました

平成26年12月6日に恒例の年次晩餐会が開催されました。昨年までの会場が変更され、新宿区の京王プラザホテルでの開催でした。

今回は、日本山岳会富山支部から、木戸繁良さんと佐伯郁夫さんのお二人が新永年会員となられたことと、森田裕子さんが新入会員として紹介されること等があり、山田支部長をはじめ総勢11名が参加しました。

午後1時30分の受付から、6時の晩餐会開始までの間に、秩父宮記念山岳賞の受賞記念講演会、海外登山の報告会、山岳絵画の展示会、図書交換会、物品販売と各支部のインフォメーションコーナー等多彩な催しがありました。富山支部では各支部コーナーで8月に発刊された『富山の百山』の販売を行いました。

晩餐会場には510名の席が用意され立錫の余地もないくらいでした。昨年に引き続いて、皇太子殿下もご出席されました。

物故会員への黙祷のあと新永年会員(49名)の紹介があり、新入会員(211名の内45名出席)の紹介では、小島鳥水氏のお孫さんが新入会員代表として挨拶されました。

これだけの人数での晩餐会というのは、なかなか経験できるものではありません。次回は創立110周年記念の式典ということで、期待をしているところです。

山との関わり方も以前よりは多様化しており、ピークハンターの時代から山を慈しむ時代へと変化しています。多様なニーズに応じていくことが全国組織の山岳会に更に求められてくることを実感した晩餐会でした。

(河合義則 記)



晩餐会場で記念撮影する富山支部の参加者一同

## 初めての年次晩餐会と高指山山行に参加して

12月6日(土)、新宿京王プラザホテルの重厚な絨毯を踏んで、絵画の展示などがあるフロアに上がると「富山の百山」を販売しておられた山田支部長と金尾会員が目に入り、ドキドキする気持ちが少し治まりました。

暫くして晩餐会の会場へ入りました。今回の富山支部からの出席者は、金尾、河合、川田、木戸、渋谷、本郷、松本、三好、山田、若尾(50音順、敬称略)と私の11名でした。「祖



平成26年度年次晩餐会において紹介された新入会員

母山」のテーブルに着席し、皇太子殿下御臨席のもと、晩餐会が始まりました。私は目の前のナイフ、フォーク類の数にも圧倒され、重厚な雰囲気には舞い上がりました。そして、新入会員の紹介のときには、光栄にも「谷口けい」氏達と壇上に上がらせて頂きました。小島烏水氏のお孫さんの小島 誠氏が新入会員の代表としてお話されました。

感激の続いた晩餐会の翌日、新宿西口からチャーターバス2台に分乗して「高指山」(1174m)に向け出発しました。参加者101名での「鉄砲木の頭」(1291m)での記念撮影も楽しかったです。

お天気にも恵まれ、「富士展望台コース」と銘打ってあるだけあって素晴らしい景色を堪能してきました。これらを体験させてくださった役員の方々に感謝いたします。次回もまた参加させていただけるよう精進したいと思います。(森田裕子 記)



翌日行われた高指山記念登山

## 中山 追悼登山

10月26日(日)木戸自工を8:30に出発。みごとな秋晴れで、錦秋真只中の馬場島へ向う。道中、自転車での躍動感あふれる若者をうらやましく思いながら、登山口に着く。駐車場はすでに満杯に近く、幸い下山者がいたのでうまく駐車する。

9:30、少しきつい急登をゆっくりゆっくり。相変わらず迫力ある剣岳西面を望みながらの登りは心地良い。登山者は、夫婦、小学生の親子、かつての山ガール連れ、今時の山ガール、太り気味の実年男性連れ、キトキトの若者等、それはそれは色とりどりで、登山道は挨拶の声でにぎやかである。途中幾度も剣尾根のマッチ箱ピークを見る度に挑戦出来なかった昔を思い出しながら、ようやく11:20、頂上に到着。

山頂での休憩者を数えてみると、32名とシーズン最高の人数ではなかろうか。恒例の追悼に入ろうかと思うが、流石に金尾会員の御経をあげての追悼は遠慮して、線香とローソクを上げ、各人で物故会員となった石坂・井上・湯口氏の3名を加えてのご冥福を祈る。11:50、立山川ルートを下山。このルートも7人の登山者と挨拶を交わし馬場島キャンプ場に13:30着。好天のもと、昼食を済ませ、追悼登山が終了した。

参加者：木戸、近藤、本郷、藤條、永山、渋谷、金尾、鍛冶、島津、有澤、菅田、北田 (有澤辰彦 記)

## 親睦会総会と瀬戸蔵山・大品山登山

1月20日(火) 親睦会総会  
立山国際ホテルで15名参加していつも通り持ち込み酒で大分よい加減になった。支部親睦会は今年で設立12年目、幸い昨年は会員の变化なく、皆元気に新年を迎えられ、喜ばしい限りでした。



150121親睦会翌日の出発前に立山国際ホテル前にて

総会も特段の協議事項もなく至極短時間で終了し 18 時から懇親会に移りました。皆さん次第にご高齢の域に近づかれ、お酒もそんなに飲まなくなって 20 時頃にはもうお開きとなりました。

ホテルは台湾の人が 40 名ばかり泊まっていた。台湾直行便でスキーを楽しむツアー客を受け入られていて、最近国内のスキー客は減少の一途。スキー場の生き残りにはこんな営業も必要だろう。

1 月 21 日(水) 大品山山行

7 時 30 分、大分質は落ちたが量だけは十分な朝食を終え、8 時 30 分ゴンドラ駅から上がる。幸い天候は晴れ、カンジキ班 7 名。スキーは永山、若尾、鍛冶、島津の各氏。私も行く予定でスキーを準備してきたのだが、何と！2~3 日前からの腰痛が段々ひどくなり、歩くのもやっとなでカンジキで瀬戸蔵山まで一緒することにした。

今日は平日、まだ誰もこの尾根へ入っていない。空は高曇りで 20~30cm ほどの新雪を踏みながら行くと時折吹き抜ける風が地吹雪を捲き上げ、体感温度はマイナス 5~6 度と冬山の様相を見せていた。

ここ数日のニュースで各地のスキー場界限でバックカントリーで遭難者が続出しているが、皆さんどんな装備をして入っているのだろうか？

我々は歩き慣れた大品山への稜線を、こんもり雪で覆われた立山杉や細枝に霧氷の簪をつけたブナ林を、新雪の感触を楽しみながら約 1 時間で瀬戸蔵山に到着し、今日はここまでとコーヒータイム。大休憩の後、下山に向かった。

スキー班の永山、鍛冶、若尾の 3 氏は大品山を目指し、そこから新雪を蹴散らしながら栗巣野スキー場への林間滑降を楽しんだ。その様子を後日若尾さんのメール映像で楽しませて頂いた。

今日は平日だが予報が晴れと報じていた故か、我々の後ろから 4~5 パーティ 10 名ばかりが大品山から栗巣野へのツアーをするのに登って行った。みな 40~50 歳代で装備もそれなりの準備をしているようで、これなら問題はないだろう。勿論私らもちゃんと登山届を提出してきたし、日本山岳会の名にかけても事故だけは起こさないようにしなくては！

参加者：石浦、有沢、平田、山田、近藤、山岸、永山、金尾、渋谷、本郷、村上、川田、鍛冶、若尾、森田 (近藤 晋 記)



親睦会翌日の瀬戸蔵山方面の山行

## 私のかかわった山岳遭難 その 2

### 魚津岳友会をつくって

佐伯郁夫

私が高校を卒業した年の 4 月に魚津高校は全焼した。山岳部 OB として現役部員と共に合宿に加わり、行動し、技術向上を助けてきたが、火災の後、これまで山岳部に理解があった校長と顧問本多啓七 (JAC3991) が共に転出してしまった。その後に来た顧問や校長は山岳部があまり好きでなく、OB の参加も毛嫌いするようになった。私は自由に活動できる山岳会の創設が急務と考え、1956 年、数名の仲間と魚津岳友会を創設した。この年は日本のヒマラヤ遠征隊がマナスルに登頂し、登山ブームの始まりであり、各地に多くの山岳会が誕生する。

私の軸足が魚津高校から魚津岳友会に移ったばかりの 1957 年、藤田正二(魚津高校後輩)、大村俊夫の二名が 2 月 10 日、僧ヶ岳 1000m にテントを張って山頂へ向かったまま帰らないというので捜索の要請があり、まだ会員全体での冬山合宿も行っていない仲間をつれて冬の僧ヶ岳へ向かった。

私は風邪で体調不良ながら捜索の指揮をとることになった。この事故は春になって多くの人が捜したがいまだ行方がわからずじまいである（注1）。

その年、8月22日夕方、先輩の大野一郎氏（JAC3856）から私の勤務先に電話があり、毛勝山で遭難があったので出動してくれとのこと。当時警察には山のわかる人がいなかったのである。大急ぎで登山の用意をして警察の車に乗り、救援を求めに下った人と共に警察、消防と熊西という医者を伴って山に向かう。毛勝谷を登る予定がコースを間違え、大明神沢に入って急峻なガレ場を登ったのであった。大怪我をおった人を担架に乗せて降ろした。この人たちは私より1年上の魚津高校仲間（山岳部員ではない）であった。その後、片貝流域の遭難には何度もかりだされることになる。

13回国体（1958年）にそなえ、富山県山岳連盟を再興することになり、呼びかけられて加盟した。そこでは多くの知己を得ることができ、なかでも不二越山岳会の福本彰君とは親しみを深め、私たちの会の合宿にも参加し果敢に活動した。やがて福本と二人で厳冬期の小窓尾根を登ることになる。当時、厳冬の小窓尾根は未踏と考えられていた（注2）。それは大変天候の悪い年で、1958年12月30日から入山し、2人で長いコースのラッセルをし、下山したのは1月10日である。それは過酷な登山であった。ドームのあたりで追い越した富山大学山岳部の人達も数日遅れて山頂に立っている。

1960年、魚津岳友会の春山合宿は池ノ谷二股にテントを設営し、劔尾根や池ノ谷奥壁の岩登りを目標として行った。そこへ会員の弟 牧友久（魚津高校山岳部）が加えてほしいというので4日間行動を共にし、合宿を解散した後、彼は池ノ谷左俣を登って北方稜線へと単独で出発したのだがルートを誤り、小窓尾根から西仙人谷へと転落した。遺体となった牧友久は不二越山岳会の福本君等によって発見され、連絡を受けた私たちによって収容されたのである。当時、新聞で、この事故は無謀登山であると激しくたたかれた。よく考えると高校生に残雪期の北方稜線を踏破するだけの技術、知識、状況判断などは限界を超えている。当時は勇ましい活動を支援する風潮があり、私も彼を慰留する気持ちを持てなかったことを残念に思っている。彼の兄 牧恒夫が魚津岳友会員であったことも気軽に許すもととなったので、自分を不甲斐なく思うのである。

日山協は1961年3月19～25日に西穂高で雪上技術講習会を行い富山県から井上晃と山口得美が受講し、その伝達講習を青木昭三氏がリーダーとなり、私と山口得美がコーチとなって、雷鳥荘をベースに4月上旬に行った（注3）。4月15日講習を終わって下山する時、経営者の志鷹定一氏から宿泊者が前日から行方不明なのでぜひ捜してくれと懸命に頼まれたが、当時は電話などなく無断欠勤すれば免職になりかねないので、冷たいが断って山を下りる。

以来、捜索を断ったことが気にかかっていたので、妻を伴って5月7日山崎カールをスキーで登り、雪の上に突き出た片方の足（登山靴）を見つけた。すぐ雷鳥荘に連絡して、遺体の収容は小屋の人たちによって行われた（注4）。

ところで、福本君は不二越山岳会の中に彼の登攀に対して同調できる人はなく、魚津岳友会の合宿にも何度か参加していたのだが、柳原行正・小池加津夫という若い二人が入会したので、彼等から持ち前の快活な性格が慕われ、多くの山行を重ねて技術を向上させ、三人で冬の劔尾根を目指すチームとなったのである。二度の試登を重ね、今度こそという気持ちで池ノ谷へ向かったのである。雪の降る厳冬の池ノ谷の危険を知っていたと思うが、焦りもあったのか、1961年12月27日降雪中の池ノ谷へ入って帰らぬ人となった。

さらに、年が明けた3月、魚津高校の吉野利昭（注5）と中山常人が池ノ谷に入り、二股の少し手前で右俣からの雪崩に中山が埋没して死亡。5月17日、私が弟・邦夫と坪川賢三の三名で池ノ



谷を探索していて中山を発見することになった。私はすぐに馬場島へ下り電話で魚津高校 OB を集め、翌 18 日には親元へ遺体を届けることができた。

一方、不二越の三名の搜索は苦労の連続となる。

池ノ谷と白萩川の合流点にはワイヤーロープで遺体の流出を防ぐための柵を設置した。流れてくる木屑などを取り除き保守するため、毎週通って冷たい雪解け水に腰までつかって作業をする。この作業を不二越山岳会の人達と交互に行った。そのうち不二越の光岡孝之という部員が柵のパトロール中に落ちて死亡するという二重遭難が発生。これを機に不二越はほとんど手をひいてしまい、私達だけで作業を続けた。

7 月末、魚津岳友会の夏山合宿は池ノ谷二股をベースにして行うことにした。不二越遭難者のパトロールも行い、その合宿中に柳原・小池の遺体を発見することができた。営林署に届け出て現地の木を伐り、私が二人の遺体を茶毘にした（注 6）。福本の遺体が出たのは 8 月の下旬ころである。私はこの頃、搜索の無理がたたって痔を患い入院手術となる。福本の葬儀の日は病院を抜け出して参列したものである。

なお、柳原君の遺体を発見した柿沢義宣君はその 1 ヶ月後、明星山南壁で墜落死した。これは、魚津岳友会最初の死亡事故となる。

<次号へ つづく>

注 1 宇奈月スキー場手前に遭難碑がある。

注 2 1957.12.18~30 早稲田大学によって小窓尾根往復で登られていた(リュックサック 80 周年記念号)。

しかし、小窓尾根から早月尾根へまわったことでは私たちが初登攀。

注 3 雷鳥荘は今のキャンプ場の位置にあり、4 月 1 日から営業していた。

この行事については山岳連盟 50 周年記念誌『太刀の嶺高く』に欠落している。

注 4 1961 年、大阪府枚方市の公務員 今中悌二さん(大阪白稜会員)であった。

注 5 吉野利昭はその後法政大学に入り、山岳部の夏山合宿中、チンネ H クラックで墜落死。

注 6 当時は遺体運搬不可能な事故の場合、山中の立木を伐って火葬し、骨だけを持って下山した。

## 時計回りの台湾

鍛冶哲郎

昨年 12 月に台湾を時計回りに一周してきた。台湾に勤務歴のある友人との弥次喜多道中の予定だったから、大船に乗ったつもりでいたのだが、間際になって友人が行けなくなった。よほどやめようと思ったが、台湾は親日的だし治安が良いから大丈夫、困ったときはケータイで通訳をやってやるという友人の言葉に背中を押されて一人旅を決行した。航空券以外は何も準備をしておらず、急遽、初日の宿だけは出発前夜にネットで探し、富山空港から飛び立った。宿泊は、台北を振り出しに、太魯閣、台東、高雄、阿里山、台中、そして最後は台北空港待合室の 7 泊。連日、安宿探しと列車・バスの乗り継ぎに明け暮れる効率の悪い旅となったが、多少なりとも生の台湾に触れることができたような気がしている。ちなみに台湾の交通機関は、コンパクトな国土に鉄道とバスの路線網が充実していて使いやすい。料金は日本より安く、清潔さは同程度、ダイヤは正確である。タクシーも安い、一人旅には負担が大きい。



台東の市場

台北の宿は、日本人が経営するゲストハウスで、台北駅から歩いて 5 分という便利さながら、一泊約 1800 円。近くの屋台か大衆食堂で食事をすれば、極めて安上がりだし、ホテル代との差額で台湾料理を堪能する

のもいいだろう。相部屋になった日本人男性三人はいずれも一人旅で、私と同年代の二人は、台湾には一か月、二か月単位で何度も来ているという旅慣れたシニア・バックパッカーだった。この類の宿は見所やお勧めの宿など旅の情報を得るのに好都合で、初日の宿に選んだのは正解だった。二泊目の太魯閣の宿は、ビジターセンターの女性が電話で予約をしてくれた。「青年旅舎」というからユースホステルだろう。同室の相手は、アジアを自転車旅行中のオーストラリア人で、57歳の紳士だった。すでに国を出発して二年目とか。インドネシアの島々を皮切りにインドシナから中国へ行き、台湾の前は、日本を70日かけて巡ってきたという。オフシーズンのせいか、宿周辺の食堂はどこも閉まっていたら、宿の経営者夫妻が自分たちの晩飯を分けてくれた。三日目の台東では、中国は広州から来たという若い女性2人連が、スマホを頼りに一緒に宿を探そうというからしばらく同行した。ほどほどのビジネスホテルがあったので、私はそこに決め、もっと安い宿を探すという二人と別れた。一人部屋の気楽さを味わうと、それ以降は相部屋に泊まる気がなくなり、一年以上もタフな旅を続けているオーストラリア氏の気力と体力に恐れ入った。

今回、いわゆる観光地として訪ねたのは、太魯閣、墾丁の両国家公園と阿里山国家風景区の3箇所である。いずれも、台湾を代表する景勝地だけあって、ビジターセンターや歩道、トイレなどのレベルは日本以上で、合衆国の国立公園に近いと感じた。また、客引きや陳腐な土産物は皆無ではないが、旅館や売店は統制がとれており、概して良心的である。台湾の自然保護や観光関係の行政がよく機能しているということであろう。

印象深かったのは、黒部峡谷を凌ぐと思われる豪壮な太魯閣の大地形と、阿里山のヒノキ林である。阿里山では、100年ほど前に植えられた台湾檜と（日本の）杉の植林地が標高2000m以上にまで広がり、その中に、わずかに残っている「神木」の見事さは屋久島の縄文杉のようだ。その昔、この地の林業振興に貢献した東京帝国大学〇〇教授の碑や林内に残るワサビ田など、思わぬところで戦前の日本に出くわし、また、明治神宮の大鳥居や靖国神社にも台湾檜が使われていると聞くと、複雑な気持ちになる。歴史認識はさておくとしても、太古のヒノキ林を伐ってしまったことを、なんとももったいなく思うとともに、インドネシアのボゴール植物園のエピソードを思い出した。この植物園は、かつての宗主国オランダが作ったもので世界的に有名である。第二次世界大戦中に、インドネシアを占領した日本軍により園内の大木が伐られそうになったが、ボゴール植物園の木は、当時の園長であった東京帝大▽▽教授が抵抗して守られたのである。話はそれしたが、阿里山鉄道も、戦前の日本がヒノキの搬出を目的に建設したもので、丁度、富山駅から室堂までの標高差を、スイッチバックやスパイラルトンネルを駆使して登る。車窓は熱帯から温帯へと移りゆき、終点まで行けば玉山が眼前に眺められる阿里山鉄道は、鉄道ファンならずとも大変興味深い。



行く先々で台湾の人の親切に助けられた旅でもあった。恒春から最南端の墾丁国家公園へ行くバス内でのことである。どこで降りたらいいかと運ちゃんに訊けど言葉が通じず困っていたら、他に一人しかいない乗客の女性が、懸命に身振り手振りで教えてくれた。きれいな景色があれば、見ると合図をしてくれる。「きれいですね」と答えると、うれしそうな顔をする。彼女は耳の不自由な方だったのである。

駆け足で巡った限りでは、確かに日本人にとって旅のしやすい国であった。太魯閣の宿で会ったオーストラリア人によれば、中国はクレージーだが、日本と台湾では、人々は満ち足りているように見えるそうである。スリリングな旅やカルチャーショックを求めるなら中国、日本と台湾は安全で心が休まるということか。また、台湾の京都といわれる台南ですら400年の歴史だから、歴史的な建造物や史跡を求めていくと物足りないかもしれない。台湾の魅力は、南国の自然と人であり、安くておいしい料理や果物である。そして、九州とほぼ同じ大きさの島に、3000m以上の山が100座もあるのだから、地形は急峻で豪壮、登行意欲をそそ

る山がたくさんある。3500m以上は岩稜が多いから、今後の私には、3000m前後のトレッキングと麓の温泉がねらい目かもしれない。遅きに失した台湾の旅ではあったが、日本の過去や隣国との関係を考えるためにも得るところ少なからず、老後の楽しみがまた一つ増えてしまった。

## 支部長会議の概要メモ

とき：平成 26 年 12 月 6 日（土）10：30～12：30      ところ：京王プラザホテル 47F 会議室「あけぼの」

### 1. 森会長あいさつ

- ・支部活性化（会員増強）と YOUTH CLUB（次期リーダー育成）に力点
- ・高齢化対策と財政基盤の確立が課題→会員サービスの向上と一緒に検討（会友制度のあり方も検討開始）

### 2. 議事

#### 会務報告

#### 1) 110 周年記念事業について（黒川副会長）

#### 2) 安全登山について（川瀬理事）

- ・「遭難対策規程」と「登山計画書の提出・事故連絡要領」を制定し運用開始
- ・支部登山指導者講習会について（宮崎支部活性化 PT）
- ・安全登山実技指導講習会について（古野副会長）国立登山研修所を使い内容充実

#### 3) 「日本山岳会の説明会」の開設について（永田総務委員）

- ・入会検討者、新入会員を対象に定期的に年 5 回程度 総務委員会主催で開催

#### 4) 『新日本山岳誌』改訂版の刊行について（節田副会長）

- ・創立 110 周年記念企画として来年 11 月出版すべく進行中、3 月末が原稿締切

#### 5) 第 16 回秩父宮記念山岳賞について（黒川副会長）

- ・大澤雅彦氏「湿潤アジア山岳の垂直分布帯の成立と保全に関する生態学的研究」
- ・今年は山岳登攀部門は該当なし

#### 日本山岳会の財政問題について（吉川財務担当理事）

- ・日本三百名山の印税（10 月初め入金）の送金が遅れお詫びする。今週各支部へ送金済
- ・会費収入の減少 ← ①会費滞納者の増加、②会費免除会員の増加
- ・寄付金と助成金の収入増（ただし特定の使途が指定）→事業活動の活性化による会員増強が生き延びる道？  
準会員などの会員制度と会員サービスのメリット

（支部長からの意見）

- ・入会希望者に会員メリットを説明しにくい。      ・「山」は新入会員に魅力ある情報が少ない。
- ・入会金を支部助成金で免除したらどうか。（実行している支部長でミーティングを）
- ・登山は大きなマーケット（年間 5000 円億円）、関係団体から賛助会員を募ることは可能。
- ・登山教室を実施して一般からの入会者増（未組織登山者との接点）。
- ・御岳山の事故に対する動きが見えない。      ・地元の私立大学との連携は大きなメリットあり。

#### 全国支部懇談会について

- ・埼玉支部大久保支部長からお礼、参加者に写真を CD で配布予定
- ・四国支部今井副支部長から H27 年 4 月開催の案内      （山田信明 記）

## 日本山岳会創立 110 周年記念企画 『改訂 新日本山岳誌』刊行に伴う校正作業について

創立百周年記念事業としてナカニシヤ出版から刊行された『新日本山岳誌』の改訂版が今年の 11 月末に出版の予定です。富山支部が担当した46山の山座解説の改訂作業を下記の支部会員(順不同)にお願いしています。2 月末までですが、すでに入稿済の方もあります。

佐伯郁夫:僧ヶ岳、駒ヶ岳、毛勝山、釜谷山、猫又山、大猫山、濁谷山、赤谷山、劔岳、中山、  
黒部五郎岳、金剛堂山

木戸繁良:大辻山

村上清光:大倉山、池ノ平山、高峰山

藤條好夫:南保富士、負釣山

佐藤岳彦:大日岳

渋谷 茂:朝日岳、雪倉岳、別山、立山、浄土山

永山義春:鋤崎山

金尾誠一:水晶岳、赤牛岳

本多秀雄:赤木岳、鉢伏山、高頭山

西川雄策:袴腰山、高落場山、八乙女山

松本睦男:小佐波御前山、夫婦山

本郷潤一:人形山、三ヶ辻山

志水哲也:奥鐘山、黒部別山、丸山

山田信明:鳶山、越中沢岳、薬師岳、大門山、奈良岳、見越山、大笠山

初版になかった山として新規に 大鷲山(藤條)、牛岳(松本) (山田信明 記)

## 平成 27 年度前期の行事予定

- ・第31回全国支部懇談会(四国支部)  
4月11日(土)～12日(日)  
香川県高松市
  - ・平成27年度支部総会  
4月17日(金) 18:00～  
富山電気ビル
  - ・5月例会山行(元取山)  
5月17日(日)  
一般募集・・・「富山の百山」を歩こう
  - ・登山道整備(高頭山)  
5月30日(土)
  - ・第30回播隆祭・記念登山(旧河内村・高頭山)  
6月7日(日)
  - ・7月例会山行(僧ヶ岳)  
7月11日(土)
- (有澤辰彦 記)

## 編集後記

今年の年次晩餐会では富山支部から木戸繁良会員と佐伯郁夫会員の二名が永年会員となられた。そして、新入会員として出席した森田裕子女史が壇上で紹介された。経験豊富な岳人がいろんな山行の機会を作っては若い岳人を指導して欲しいものだ。先日の五支部の合同山行でも、何時も同じ顔が多い。何とか少しでも若いリーダーが出てくれることを、どの山岳会でも望んでいるようだ。気楽に先輩方と行動を共にする雰囲気作りが大切だと思う。若い世代の人達は仕事が忙し過ぎるのかもしれない。しかし、山を楽しんで自然に親しむことを学ぶことが、これからの社会に本当に必要になるのではなかろうか？入会の窓を広げて前向きに会員を増やすことが急がれる。

(編集委員長 川田邦夫 記)

公益社団法人日本山岳会 富山支部会報 第 98 号

発行者: 山田信明 編集者: 川田邦夫

事務局 〒939-8095 富山市大泉中町 7-52-204 河合義則方

電話 076-492-3936 , 090-4326-6197 Eメール [kawa-mori55@air.ocn.ne.jp](mailto:kawa-mori55@air.ocn.ne.jp)